

2025/11/2 「すくいを告げる種」 使徒16:31-34

詩編23 幼児さんびか「ちから」 子ども123

子ども祝福式礼拝の朝を迎えました。21名の子どもたちと、保護者の方々が、ともに礼拝を捧げることができて感謝です。イエス様は、子どもを愛されました。子どもたちを通して、神様の愛と恵みが、ご家族に豊かに注がれることを、お祈りいたします。

真夜中の賛美

使徒言行録には、パウロの伝道旅行が大きな割合で記されています。今朝の箇所は、その2回目の伝道旅行でのエピソードです。当初は、フィリピというマケドニアの国に行く予定はありませんでした。アジアやビティニアといった、トルコに行くつもりだったのです。また、同行するはずだったバルナバとは意見が衝突して、別行動になって、新しいパートナーであるシラスと組んでのミッションになりました。そして、神様の愛を伝える宣教の働きなのに、その言葉に怒った人たちにより、逆恨みされ、石打ちと投獄という迫害まで受けてしまったのです。

使徒言行録を記したルカは、「真夜中」という言葉を3回も使っています。そして、それはとても印象深い場面ばかりです。神様が働かれる時間、とも思えます。この時に、その人が何を思っているか、そのことが問われているように思えるのです。パウロとシラスは、真夜中の牢屋で、何をしていたのでしょうか。その行動が、彼らとそこに居合わせた人々に、どんな変化をもたらしたのでしょうか。そうです、彼らは賛美していたのです。これは、神様への信頼の姿であり、どんな状況の中でも、神様に心を開いている人たちの姿なのです。

歌声は世界を変える奇跡の力であると、アフリカ飢餓救済のためにミュージシャンたちは「we are the world」を歌い上げました。真夜中のような時代の中で、私たちが神様の愛を受け取っていることを証しするために、私たちも賛美を捧げようではありませんか。

すくいの種

ユダヤのラビの短い詩を紹介しましょう。「こども こどもは三つのことを教えてくれる
わけもなく楽しくいられる かたときもやすんでいない 欲しいものはきっと手にする」

(トヴ・ベール・ファン・メチェリチュ) イエス様が子どもを愛されたのは、大人がいつの間にか失ってしまった、神様に喜ばれる姿を、子どもは教えてくれるからではないかと思います。子どもが教えてくれることは、人の幸せの種の部分です。幸せを求めて、枝葉を伸ばし、折られた、失った、人よりも多い・少ない、と一喜一憂するのが大人です。でも、子どもは何も持っていませんが、愛される喜びと、成長する力と、将来への希望を持っています。それは、神様が人間に与えてくださった、かけがえのないすくいの種なのです。